

立誠図書館とは

立誠図書館は明治2年に下京第六番組小学校として開校、平成5年に124年の歴史と共に閉校した京都市立誠小学校の跡地に開業した「立誠ガーデン ヒューリック京都」に一般社団法人文まちが設置する図書館です。ブックディレクターの幅允孝氏（BACH）が選書を監修した5つのカテゴリーの書籍、約3000冊を所蔵しています。

立誠図書館は「地域のまなびや」であり“もっと、つながる”をビジョンに人と本、人と人をつなぐ図書館運営を目指しています。

アクセス



阪急電車「京都河原町駅」1番出口より徒歩3分

京阪電車「祇園四条駅」4番出口より徒歩5分

ご利用の案内

【開館時間】11:00~17:00 (*複写サービスは16:00まで)

【休館日】毎週月曜日、年末年始

【お問い合わせ】TEL:075-585-5561 FAX:075-585-5562 MAIL:info@bunmachi.org

【公式サイト】<https://www.bunmachi.org>

【所在地】京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町310-2



立誠図書館

検索

*『Page. 3』では広告を募集中です。お気軽にお問い合わせください。



発行日:2020年11月21日
発行:一般社団法人文まち 立誠図書館/企画・編集:栗山万葉
編集:石橋美樹・田原恵美子/デザイン:脇田友

一人・本・地域をつなぐ

Page.
3



立誠図書館機関誌

第8号
2020.11

卷頭インタビュー

本をよく噛んで
おいしく食べる

ブックディレクター
幅允孝
(BACH)



はみ出しコラム

京都には魔界がいっぱい!?

蔵書紹介

よむどす
YOMU-DOSU?

LIBRARY REPORT

EVENT INFO

BOOK de 豆知識
まぼろしのレファレンス

妖怪や怪奇現象ってなんだろう?

京の本好きさん

ドイツ菓子屋 Frau Pilz

巻頭インタビュー

本をよく噛んで おいしく食べる

Yoshitaka Haba 幅 允孝

立誠図書館の選書の監修を担当したブックディレクターの幅允孝さん(BACH)と立誠図書館での選書について振り返った他、お仕事や生きることについてお話をうかがいました。

【お話を伺った方】(幅) 幅允孝さん 【聞き手】(立) 立誠図書館 栗山

立誠図書館が出来るまで①

読者にしっかり本を届ける編集型の本棚をつくる

立: 2018年の仮設図書館、2020年7月の正式開館まで2回に分けて選書の監修をしていただきました。最初に幅さんにお話がいったのは2017年だったかと思います。

幅: そうですね、かなり初期の段階からお声がけいただきてプロジェクトに参加させていただきました。

立: 私たち文まちは立誠小学校の跡地を利用した貸館に関する業務をしていたので、図書館運営の経験がなくて..。なので右も左もわからない状況の時に、幅さんが加わってくださりお力添えいただきましたね。

幅: 「そもそもなんで本が必要なのか」と言うところから一緒にお話ししながら取り組んだことが僕にとっても良かったですね。2020年の開館に先駆けてプレハブの図書館と建設予定地の3隅にストリートライブラリーのような図書館ボックスを作る。124年の歴史を持つ小学校の跡地を地域コミュニティの場所として機能させていたことを引き継ぎながらライブラリーを作る。長期間かつ、変容し続ける、僕らもやったことがない新しいプロジェクトでしたね。

立: 仮設では〈食べる本棚〉〈京都歩きの本棚〉〈立誠小学校 DNAの本棚〉という3つのカテゴリーをご提案いただきましたね。

幅: そうでしたね。どういう機能と想いを託せるのかをディスカッションしながらね。その時はトラベリングコーヒーが併設だったので、コーヒーを飲みにくる方がふらりと寄って本を読むことも想定して、高瀬川のほとりで読むより気持ちが良いものを集めました。観光



幅允孝（はば・よしとか）

有限会社 BACH（バッハ）代表。ブックディレクター。人と本の距離を縮めるため、公共図書館や病院、動物園、学校、ホテル、オフィスなど様々な場所でライブラリーの制作をしている。最近の仕事として2020年7月に開館した安藤忠雄建築の「こども本の森 中之島」のクリエイティブ・ディレクションなど。近年は本をリソースにした企画・編集の仕事も多く手掛ける。

Instagram: @yoshitaka_haba

写真: 藤田一浩

の方を想定しながらも、地元の方も含めてゆるりと楽しめることを考えていきましたね。

立: 図書館の機能という面で私たちも葛藤しながらやってきました。図書館を作るとなったものの、具体的にその機能のイメージができるおらず、「本さえあればいい」と言うような厳しい目線もあったと思います。

幅: ライブラリーの意味みたいなものも結構変わってきていますね。昔だったら「タダで本が借りられる場所」と思われたりしましたが、今では教育とコミュニティの場所として認識されるようになってきました。蔵書数に関しても昔はとにかくたくさんある方が立派な図書館だと。ですが、グーグルが全ての本を電子化するライブラリープロジェクトを始めたり、本のデジタル化が進んだことで、どんなに蔵書数が多い図書館でも冊数では敵わなくなっていく。となるとリアルな図書館は全ての本が選択の結果であり、何らかの意図をもって選ばれた本がある場所にならざるを得なくなつた。本がたくさんあることよりも、1冊を読者にしっかりと届けることが重要ではないかと思って僕らは仕事をしています。そこで今回もただ本が置いてあるので

はなく、テーマを作りしっかりサイン化し、それどのように並べるのかを工夫しています。

立: 当館は広さや蔵書数では規模は小さいですが、すごく楽しんでもらえると思っています。

幅: そうですね。最大の特徴としては僕らが「編集型の本棚」と言っている部分ですね。図書館の多くが採用している日本十進分類表(NDC)の分類とは違って色々なジャンルの本を組み合わせながら、その連なりや、奥行きみたいなところを楽しんでもらいたいと思っています。目当ての本だけを探すのではなく「こんな本もあるんだ!」と興味が数珠つなぎで広がっていくと僕らは嬉しいですね。

立: 複合施設の中の図書館なので、ここに図書館があるということを予期していなかった方々もご来館いただいていると思います。読書会員^{*}にもご加入ください、定期的にご来館いただいているです。

幅: 素晴らしい。今は検索型の世の中だから即効性の高い情報がもてはやされがちですが、小学校の跡地という背景上、人間の好奇心や学ぶ心が根付いているように感じるので、本のようにゆっくりと個人に染み込む効果的なメディアがよく合っていると思います。加えてコロナ禍ということもあって、感染症に関してエビデンスのない情報が発信されています。何が本当で何が嘘なのか判断がつきにくい時に、結局どうするべきか自分で考えるしかない。そんな時に自分の意見をつくるために幾つかの本を読み比べたりして、意見の精

度を上げていくというか。そういうようなことを立誠図書館でやってみて欲しいですね。京都に関しても色々な本があるので、色々な側面を知りながら、その人の京都観を作ることもできると思います。

立: 正式開館では〈世界の入口となる本棚〉と〈アートの本棚〉という2つのカテゴリーを協議しながら増やしましたね。さらにカテゴリー内でもテーマを設け、その中にさらに細分化されたインデックス表示が増えましたよね。

幅: インデックスなしで自由に探してもらうよりも、より詳しい促しがあった方が手に取ってもらえるのではと感じ、急遽配架作業中に予定よりも増やしました。「良い本が集まっています」と言うだけでは、なかなか伝わらない。今は数百文字の略書きとか、数十秒の動画で人をどれだけ動かせるのかと時間の奪い合いが激しいですが、本の世界に没入するには時間がかかります。その時間の奪い合いの中で読んでもらうためには、どういう本を集めるかだけではなく、選んだ本の差し出す方法として小分けのインデックスも結構重要なかなと思っています。



立誠図書館が出来るまで②

どんな本をどのように差し出すのか

立: 幅さんやバッハの皆さんはどういう選書をされているのですか?

幅: 今回はベースとなる仮設の時に僕が選んだトーンや流れは大切にしました。仮設から現在までの間に新しい京都の本も出ていますし、新しいカテゴリーもあるので、まずはそこを重点的に押さえながらベースになる部分を僕が集めて、そのリストを見ながらスタッフも選書し、ある程度のところでそれぞれ集めたリストを見せ合って取捨選択します。

立: 予算上省かないといけないこともありますよね?

幅: そういう場合も出てきますけど、立誠図書館の場合は冊数を積み上げるというよりは、あるべきものを1冊、1冊足していくことが重要でした。今が良いだけではなく10年以上経っても、お客様に刺さるかどうかと言う視点を、取捨選択の時に大切にしました。〈立誠小学校 DNAの本棚〉とかどっこ図書館〈コミュニ

ティー〉では近隣の歴史や映画に特化しているので、本を読んで調べる作業と集める作業を同時並行でやりました。

立: 立誠は長い歴史の中になりますし、地域のみんなの想いも様々ですので大変な作業だったのでは?

幅: 地場を紐解くことが選書する時のキーポイントになるので立誠は歴史にせよ、何にせよ関連している本がたくさんあるのでありがたかったです。卒業生の方を中心に地域の方々ともお会いして、映画の話から近所で起こった火事の話まで生の声もお聞きして、取り入れる時間も十分にあったので丁寧に実現できたのではないかと思います。

立: 仮設の時から他に変わったことと言えば、数冊だった図書館ボックスがかどっこ図書館として大きく、機能も充実しました。3つのテーマに分け、それぞれ役割が違いますが、配架する時に意識されたことはありますか?

幅: かどっこ図書館〈コミュニティ〉はやはり地域に由

来のある、坂本龍馬人形や、電車のジオラマなど立体的なものも集めて博物館と言うと大袈裟ですが、そういう見え方を心がけました。一方でかどっこ図書館〈キッズ〉は子たちが自由奔放に楽しむと思い、あまり本の見せ方としてテクニカルなことはやらず運用のしやすさを。一方でかどっこ図書館〈アート〉は「魅せる」といいますか。アートブックは他の本に比べると大きかったり、装丁に対するこだわりが高いものが多いのでその辺りも見せていました。もちろん読んでもらってなんぼですが、読んでみたくなる仕掛けとして意識しています。加えてソーシャルメディアとかでも広がってもらえるといいから、写真がとりたくなるみたいな「映え」ちょっとだけ心がけました。

立：本の管理面で面白いと思ったことは、ブッカー^{*2}ですね。仮設では幅さんのご意見を元にブッカーをかけずにスタートし、正式開館にあたり検討を再度しました。結論としてはかどっこ図書館〈キッズ〉の絵本のみブッカーをかけ、他の本はブックカバーと本の固定のみに留めました。これは面白いなと。

幅：どんなところが面白いですか？

立：図書館の本はみんなで読んでいるので、どうしても汚れたり、折れてしまったりしますよね。現在は感染症対策の観点から閲覧された本は24時間以上の隔離で対策しつつ、気を使う部分もあるのですが。これは、これで悪くないのかなと思う時があります。

幅：そう、おっしゃる通りで、どちらかと言うと木の家具とかみたいに人の痕跡とか、使い続けた色の変化や傷に味があると言われるのに似ていて。前の人があなたの痕跡も含めて立誠の蔵書みたいになって欲しいなって。ブッカーは守られる一方で、1枚膜を隔てて本と接しているので手に持った時のファーストインプレッションから変わってしまうので……。どちらが正しいという話ではないんですけどね。

立：その質感も大事にするというのも本と接する1つの楽しみだと思いました。

幅：今の時代、紙に刷って、それを製本して本にするな



んて、お金と時間と労力がすごくかかるけど、テキストをデジタルで読む以上情報量みたいなものが造本というものには込められているので、個人的にはそれを味わいたいなと。

立：いつしかの会議で幅さんが「お客様を信頼して本を貸すことも大切」とおっしゃられたことがとても記憶に残っています。実際にお客様が本を借りられる時に、バックに直で入れるのではなく1枚別の袋を用意してくださったり、風呂敷に包んで持って帰られたり。すごく大切にしてくれるのを見ると、幅さんの言葉を思い出します。

幅：最高ですね、風呂敷に包んでくれるなんて。地域の共有財産としての認識や、お客様をまずは信じるところからスタートしてやっているから、出てきているそれなんじゃないですかね。「これしないでください」「あれしないでください」と言ってばかりだとそういうコミュニケーションにはならない気がします。本の内容もあるけれど、そこにいる現場の皆さんとの扱い方とかその併まいとか、そういう全部が総合して、アトモスフィア作りみたいなものにはなっている気がします。

立：幅さんとの図書館作りでたくさん学びました。

幅：いやいや。これが他所から見たら図書館作りの王道ではないんですけどね。でも「立誠はそっちじゃないな」って(笑)。

立：そうですね(笑)。わからなくて困ったこともありますし、ご不便をかけてしまう部分が今後もあるかもしれない一方で、自分たちなりに方法を考えて試行錯誤した結果が立誠図書館に適していたこともあると思います。

幅：思い返してみると、本を置く意味とか、本の読み方って差し出し手である図書館がコントロールできないものがあるので、どこまでが差し出し手の領分なのかというようなことをお話しさせていただいたと思います。そういう作る過程で検討したことが現場に息づいて端々に反映されている状態になっているので、我々としても嬉しいというか。良いプロジェクトだったなと思います。

本をよく噛んでおいしく食べる

立：コロナ禍ということもあり、仕事のしかたや生き方について改めて考えた方が多いように感じています。そこで幅さんに、仕事に対するスタンスや生活で心がけていることなどをうかがいます。まず、ブックディレクターは珍しいお仕事ですがどのように始めたのですか？

幅：もともと僕は本当に働きたくなかったんですよ。

立：働きたくなかった！(笑)。

幅：生まれが1976年なのでバブルはかすらず、受験は超激烈、就職は超氷河期と言う祝福されたことがない世代でした。僕は慶應義塾大学の法学部政治学科で勉強をし、同級生はなんとか物産だと銀行に就職を決めていくのですが「何か違うんじゃないかな？」と思ってしまって。それで就職活動もせずに、郵便局で夜勤のバイトをして貯めた120万円を握り締めてバックパック旅行で幅のお祭りを巡るツアーに行きました。まず語学はなんとかしておこうと思ってカナダのオタワにある大学で英語のショートプログラムに入りました。その後はジャズフェスティバルに行ったり、デトロイトテクノが好きだったのでデトロイトのクラブでジェフ・ミルズ^{*3}がレコードを回すのを見てみようとか。他にもアルヴァ・アーレト^{*4}という建築家が好きで彼が作った本屋さんをフィンランドに見に行ったり……、つまり働きたくないなって旅から帰国して就職活動をしましたが、就業経験もないし、第二新卒もないからすごく困って。その時に青山ブックセンターだけは応募出来そうだったので「青山ブックセンターは好きだったし、よく行っていた」と思って採用試験を受けて、本屋に勤め始めました。旅でわかったのは何かと言うと、実際にその場所に足を運んで見ると、憧れの対象だけで終わるのは違うということ。例えばテート・モダンでロスコ・ルームに行った時は本当にびっくりして。とても大きくて、本とかで見たのとは違う圧みみたいなものを感じましたね。実際に体験してみたことで、対象物が好きかどうかよりも、それに対して自分がどう思ったのかという間合いや関係が大切だと気が付きました。自分と対象物との距離を実測しながら、自分の血肉にすることで自分の言葉で語れるようになります。その方法を会得しました。本も一緒に、本は放っておいても「僕はこんな本です」って話すわけではなくて、読んだ人が、読んだ自分も含めて誰かに伝えない内容が届かない。本を扱う仕事をする



にしても、まずは本を自分の中に取り入れて、その上で扱わないといけない。20代初期は、自分にとって本をよく噛んでおいしく食べる方法みたいなことを考えた時間。そうして勤めていると2000年にアマゾンが日本に入ってきて書店で全然本が売れなくなり、人が本屋さんに来ないのであれば人がいる場所に本を持って行くしかないと思い始めました。その後、パパイヤブルータスを立ち上げた編集者の石川次郎さんに拾っていただき、編集の仕事を経験しました。学校で教わる図書館のあり方、分類学だけではなく、自分なりに本を組み合わせて編集するやり方はその経験が大きいです。加えて、大学時代は法学部でしたが文学部で美術を教えてらっしゃった近藤幸夫先生^{*5}の講義も受けられて。美術館で長く主任研究員もやっていた方なのでキュレーションの根元を学びました。石川さんと近藤先生から隣同士ではなかった物と物を組み合わせて新しい意味や価値、メッセージをどうつくるかということを学んだというか。それを本棚というメディアで行う方法を考え続けています。今まで隣り合っていなかった本や物の意味や価値を組み合わせたものを楽しんでもらうこと、知らない本を偶然手に取る機会やモチベーションをどうつくるのかということを考える仕事という感じでやっています。

立：幅さんの本棚作りのルーツは雑誌編集やキュレーションにあったんですね。ちなみに「働きたくない」という気持ちはその後どうなりましたか？

幅：今もあまり働いている意識がないですね。仕事とプライベートは一体化していて、働かなければいけないという気持ちではないですね。よく言えば朝起きる理由作り。つまんなさそうだったら起きないじゃないですか。朝起きて何かをするモチベーションを保ちながら日々を繰り返すのが大事かなって個人的には思っています。

立：仕事をすることもプライベートも地続きという印象ですが、幅さんにとって仕事は生きることにもつながっていますか？生きるということはどのようなことだと捉えていますか？

幅：仕事と地続き感はありますけど、とりあえず僕が日々目標にしているのは「愉しく健やかに生きて死ぬ」ということです。

立：愉しく、健やかであることは大事ですね。

幅：それに尽きるなって。いつかは死ぬので、それに向けて限られた時間ですが、気張り過ぎず、時には上手くサボって愉しく。日々おいしいご飯とお酒は欠かさずに。ちなみに本って、読んでも人が生き返つたりもしないし、借金がなくなったりもしないし、即効性のあるものではないんですけど、やはり紙の本は良いなと思って。書き直しができないから、よく推敲するじゃないですか。事実の整理だけでなく、

言葉選び、文章のリズム、写真などに伝えようとする熱量が込められていると思うんです。デジタルで多くのことが事足りるように感じますが、人間はやはり身体をベースに生きているので、本のようなメディアにじっくりと身を浸して、誰かの感情に心を重ねてみたり、知識を取り込むことで自分の意見を作ったり出来るツールとして面白いと思います。そういう部分を上手く伝えたいと思っています。



*1 立誠図書館では読書会員（年会費1000円、2週間3冊貸出）を随時募集中です！トラベリングコーヒーのコーヒーチケット付きです。

*2 本や資料を汚れ、日焼け等により劣化し易くなることを防ぐブックカバーフィルム。

*3 アメリカのテクノミュージシャン、DJ。ミシガン州デトロイト出身。デトロイト・テクノ初期のアーティスト。

*4 フィンランドが生んだ20世紀を代表する世界的な建築家、都市計画家、デザイナー。

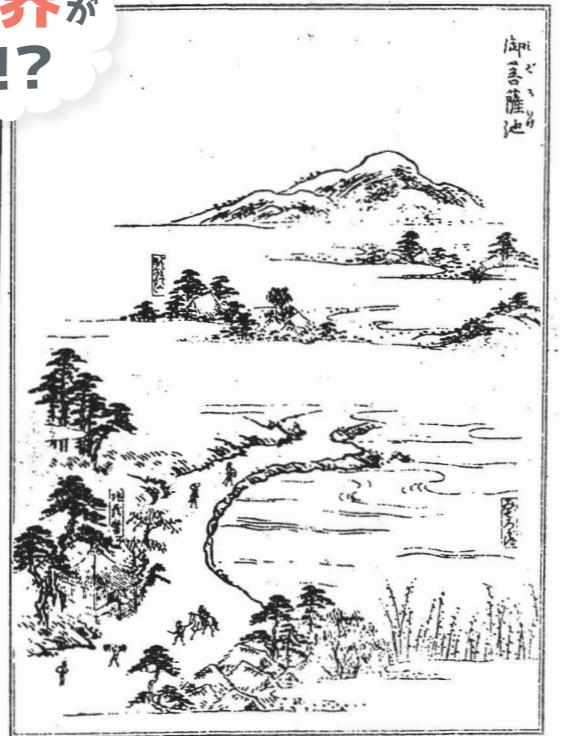
*5 東京国立近代美術館主任研究員を経て慶應義塾大学理工学部准教授、美術評論家に。プランクーシの研究など。

読み出しコラム

第7回 京都には魔界が いっぱい！？

京都は昔から魔界と言われる場所がたくさんあります。そのひとつに京都・洛北の上賀茂付近にある深泥池です。深泥池は奈良時代の高僧・行基がここで修法をしたとき、弥勒菩薩が池の中から現れたという伝説がありその為、御弥勒池と書くこともあります。

そんなありがたい伝説にも関わらず和泉式部は「名を聞けば影だにみえじみどろ池にすむ水鳥のあるぞ怪しき」と歌っているように、平安時代から恐ろしい場所と思われていました。池に「大蛇」が棲んでいたという説があったのです。この大蛇、大徳寺の和尚の説教を聞きに人間の女に化けてやってきたのです！そしてもうひとつ、池の北方にある貴船の奥に棲む鬼が深泥池を出入口にしていましたという説。御伽草子にも貴船の奥には鬼が棲むという伝承があり、地下水脈がこの池と貴船の間でつながっていると考えられていました。このような幾つかの説から深泥池は魔界と言われるようになったのです。もしかしたら深泥池で女性に化けた大蛇や鬼に遭遇するかもしれませんよ！（石橋）



【図】秋里籬島『都名所図会6巻』国立国会図書館デジタルコレクション

【参考文献】立誠図書館蔵書】森谷赳久『京都「地理・地名・地図」の謎』じっぴコンパクト新書（2010）/ 小松和彦『京都魔界案内』光文社知恵の森文庫（2002）

よ む ど す ？

YOMU-DOSU?

〈京都歩きの本棚〉〈立誠小学校 DNA の本棚〉〈食べる本棚〉〈アートの本棚〉〈世界の入口となる本棚〉の5つのカテゴリーから毎週図書を紹介する企画「YOMU-DOSU?」。毎週金曜日に立誠図書館ホームページとSNSにて更新中。



グレさんぽ

猫とかキモノとか京都とか

著:グレゴリ青山
小学館

〈京都歩きの本棚〉

私は子どもの頃から殆どと言ふ
か全くマンガを読む習慣がなく、
親しみがなかったのですが、この
本はコミックエッセイのような描
き方で、マンガに親しみのない私
にはとても新鮮な1冊でした！肝心
の内容は京都だけに限らず、お隣
の県の事や関東、また作者が大の
猫好きとのことで猫の話に、キモノ、
また文豪の話など、多岐にわたり
描かれています。思わずクスっと
笑ってしまう内容に、どんどんに
引き込まれている自分がそこには
いました。笑いが欲しいそこのあなた！
ぜひ一度手に取ってみてはいかがでしょうか??



石橋美樹
好きなこと
海外旅行／映画鑑賞／
音楽鑑賞／いい香り

ズバリ！部屋にたくさんのアロマキャンドルを
灯し、心身ともに癒されて寒い冬を乗り切ります。



見るだけで楽しめる！
おにぎりの文化史

おにぎりはじめて物語

監修:横浜市歴史博物館
河出書房新社

〈食べる本棚〉

「私のソウルフードは何だろう？」と最近考えたのですが漠然と「米系」と思いました。米系と言えばおにぎり。ちよいとつまんで食べられる楽チンフードですよね。文献・絵図調査→遺跡から出土した炭化米塊（おにぎりの可能性がある黒く炭化した米）への考古学アプローチでおにぎりの歴史の謎を追う構成です。弥生＆古墳時代の炊飯を出土資料の小さな手がかりから再現するなど、その努力というか執念に感服します。全国の1度食べてみたいおにぎりやトリビアだけではなく、何かの謎を追う人々のカッコよさ、楽しさにも触れられる本です。



栗山万葉
好きなこと
アート／音楽／食べる
こと／好きなものを正直に愛すること

加湿器で乾燥の回避、電気毛布で布団をしきり暖かくして軽装で寝るのが楽です。



ドミトリーともまんす

著:高野文子
中央公論新社

〈世界の入口となる本棚〉

この本は、もし下宿屋の2階に科学を学ぶ若者たちが住んでいたら...ではじまる漫画でありちょっと変わったブックガイド。最後に紹介される湯川秀樹の『詩と科学－こどもたちのために』に本書のエッセンスがぎゅっとつまっています。日本では高校あたりで、文系と理系に分けられその接点が少なくなっていますが、分け目をとっぱら、科学と文学を行き来することこそおもしろいんじゃないかなと思うのです。立誠図書館の「自然と科学」のコーナーには本書と並んで平凡社 STANDARD BOOKS シリーズがあり、自然科學者たちの書いた隨筆をたっぷり読むことができます。



田原恵美子
好きなこと
演劇・ドラマ・映画／お酒
にコーヒー／本を読んだり、声に出したり／犬

温かい飲み物で体の芯からあったまります。
コーヒー、紅茶、ハーブティー、チャイ…etc。



開館記念イベント開催をめぐって

本オープンに向けて準備期間中、新型コロナウイルス感染症により「先が読めない」事態となりました。「なんとかオープンできたとしても、人を呼びイベントをやっていいのだろうか」スタッフ間で何度も協議しました。「今できることをできる範囲でやろう」と決めてからはご協力いただき中京区小学校図書館ボランティアネットワークの皆様も交え、感染症対策について検討を重ねてきました。万全の対策を取りつつも恐る恐るの発進でした。無事終えることができたこと、来ていただいたお客様やご協力いただいた関係各所の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。これまで当たり前のように集まり、絵本を読んだり笑いあったりしてきたことが、当たり前ではなくなりました。公共図書館や学校図書館もコロナ禍においてなんとか読書環境を維持していくと様々な工夫で対応しています。しかし、この期間に本と向き合うことが増えて読書の良さを改めて感じた人もたくさんおられるでしょう。これから先も、本と人と地域と、そして未知なる世界と「もっと、つながる」場として、立誠図書館スタッフ一同、微力ながら頑張っていきたいと考えています。(田原)

7 / 25

立誠図書館開館記念 絵本ライブ 子どもの部 / 大人の部



2本立ての開館記念絵本ライブを「ザ・ゲートホテル京都高瀬川」のリトリートルームにて開催しました。それぞれ定員 25 名と最小限で募集。子どもの部では 10 ヶ月から小3まで幅広い年齢の子どもたちと親御さんに集まっています。中京区小学校図書館ボランティアネットワークの皆さんを読み手に迎え夏らしい絵本で楽しみました。うれしい「きんぎょ」のお土産も♪

大人の部の部は申込の動きが早く子どもの部よりも早くに締切となり、大人の絵本というジャンルの人気を感じました。愉快な絵本からじんわり沁みる絵本まで、えほん館の花田睦子さんが絶妙な語り口で読まれ、集まつた方たちを巻き込み素敵な空間が生まれていました。「子どもは絵本を体験する。大人は絵本を経験で読む」という花田さんの言葉は、年を重ねてから絵本を楽しむことを力強く後押ししてくれるものでした。

8 / 8



工作ワークショップ

夏らしさ満点のスイカのカード、口をぱくぱく動かせるぱくぱくカード、2種類の飛び出すカードを作成して楽しめました。兄弟での参加やおじいちゃんおばあちゃんも一緒にになっての賑やかなワークショップでした。

8 / 21

絵本ライブ Vol.16

8月31日は野菜(831やさい)の日ということで、夏の陽ざしをあびて成長する野菜の絵本が大集合。子どもたちもぐんぐん成長してほしいと願いを込めてお届けしました。

9 / 19

絵本ライブ Vol.17

月の美しい季節です。絵本『おつきさまこんばんは』から始まる「月」をテーマにしたよみかたり。お月様や月見団子、夜の世界、夢の世界が広がります。

9 / 19



たにこのみのお絵かきの会Vol.13 「わくわく空想キッチン」

絵描きのたにこのみさんのお絵かきの会が復活!粘土を使って作った空想の食べ物はふしぎなものがいっぱい。子どもたちの想像力に驚かされっぱなしでした。

10 / 17



絵本ライブ Vol.18

「お米」をテーマに、ほかほかごはんやお弁当、おにぎりの絵本など、お客様とたくさんのやりとりをしながら楽しみました。収穫への感謝の気持ちも、子どもたちに伝えていきたいですね。

10 / 17



たにこのみのお絵かきの会Vol.14 「○△□かたちで遊ぼう!」

透明なセロファンなどを使って形と色であそぶコラージュ作りを楽しみました。小さなお子さんでも簡単にできてとても面白い作品ができました。



2020年12月から2021年2月までのイベントのご案内

* 開催日、会場が変更になる場合がございます。イベントへの参加は事前予約制です。
詳しいイベント情報は毎月1日に公式ホームページ、SNSにてお知らせいたします。

絵本ライブ

〈vol.20〉: 12月19日(土) 11:30 開演 (12:00 終演予定)

〈vol.21〉: 2021年1月16日(土) 11:30 開演 (12:00 終演予定)

〈vol.22〉: 2021年2月20日(土) 11:30 開演 (12:00 終演予定)



会場:ヒューリックホール京都ホワイエ(仮)

内容:絵本のよみかたり。絵本で人と人、心と心をつなぎます。

参加費:無料

主催:一般社団法人文まち・中京区小学校ボランティアネットワーク

たにこのみのお絵かきの会

〈vol.16〉: 12月19日(土) 12:10 開始 (13:10 終了予定)

〈vol.17〉: 2021年1月16日(土) 12:10 開始 (13:10 終了予定)

〈vol.18〉: 2021年2月20日(土) 12:10 開始 (13:10 終了予定)



会場:ヒューリックホール京都ホワイエ(仮)

内容:絵描きのたにさんと一緒に遊びながら作品作りに挑戦します。小さなお子様もお母様と一緒に楽しめます。

参加費:お子様お一人につき材料費 500円頂戴いたします。



Photo by: Yuuichirou Tamura

ナビゲーター: たにこのみさん

1987年大阪府生まれ。京都在住。京都精華大学デザイン学部イラストレーションコースを卒業。道後オンラインセミナー2018 出店。第207回ザ・チョイス入選長場雄氏審査。!心のなかのざわめきを大切に、ふしぎな世界を描いています。

〈twitter〉@tanikonomi
〈instagram〉@konomitanii



No.7

レファレンスとは皆さんの「知りたい」にお答えするべく、必要な資料を探すお手伝いをすることです。ここは新米図書館スタッフが「もし、こんな質問があったら？」をテーマに、立誠図書館の蔵書を使って調べてみるコーナーです。

Q.

- 妖怪とか怪奇現象とか非科学的なのに、もてはやされる意味がわかりません。

A.

人間が生きるために知恵のひとつかもしれません。



【図1】その効果はいかに!『アマビエ』(肥後國海の怪(アマビエの図)) 京都大学付属図書館蔵

2020年、コロナ禍の日本で注目された妖怪がいます。1846年に肥後国(現在の熊本県)で目撃されたアマビエ(図1)という人魚のような姿のかわいらしい妖怪です。

当年から6年の間は諸国豊作である。しかし、病気が流行ったら、私の写し絵を早々に人々に見せよ^{*1}

まさに、私たちが求めていた新型コロナウィルスを撃退してくれるかもしれない(?)スーパースターです。疫病に関連するとバットスターが京都の夏の風物詩祇園祭に関連することはご存知ですか?その舞台である八坂神社は疫病神として恐れられた「牛頭天王」(図2)がかつての祭神です。ルーツとなった逸話はこんな話です。牛頭天王が所用で人間に宿を借りようと裕福なA家に行ったら門前払いを食うも貧しいB家は親切に泊めてくれた。そこで「これから死の病を振りまいて暴れるけど、恩があるB一族には除難の方法を教えてやる」と。B家とは蘇民将来。そこで「蘇民将来子孫」の札をかけたり、丁寧に祀ることで難を逃れようとしたのです。水木しげるの妖怪図鑑に登場する疫病神も道を教えてくれた人には助かる方法を教えたり、意外と疫病神は恩義がありますね。

つぎに妖怪について少し学問的に紐解いてみます。定義は難しいそうですが、①妖怪存在(妖怪そのもの)、②妖怪・怪異現象の2つを妖怪と定義し、祭礼の有無で神と区別するそうです。妖怪という知識そのものは非科学的知識のひとつですが、人々の想像力を刺激して豊かな文化を作ったのは皆さんご存知かと思います。研究領域でもありますし、『ゲゲゲの鬼太郎』、怪談話など今も昔も愛される創作物があります。

知的好奇心、娛樂的な側面ではなく、人々の生きるために知識という側面で見つめることができます。文化人類学・民俗学者の小松和彦は妖怪について「今日の観点」において「合理的な知識」であると指摘しています。歴史の中で幾度となく医学や化学的に理解や解決が困難ではあるけれども、大切な人を失う悲しみ、理由のわからないものへ対する行き場のない怒りが溢れたはずです。そんな時なんとか現状を理解しようとするための道具的な知識のひとつが妖怪なのでしょう。説明のできない存在や力の存在を信じるのは、無駄なことなのか、有益な知識なのか、はたまた実在するのか?今もなお人々を包み込む先人の知恵であることは間違ひありません。(栗山)



*1 〈引用〉水木しげる『決定版 日本妖怪大全 妖怪・あの世・神様』講談社文(2014) P57,17~19
【参考文献】立誠図書館蔵書
小松和彦『妖怪文化入門』角川文庫(2012)
中田昭『京都祇園祭』京都新聞出版センター(2019)



【図2】『辟邪絵』(疫鬼を退散させる善神を描いた絵)に描かれた天刑星にたべられる牛頭天王 奈良国立博物館所蔵

第4回



星の数ほど(!?)ある本の中から読む本を選ぶことは至難の技。そこで「京の本好きさん」に本をオススメしていただきました。このコーナーは本好きさんに、次回ご登場いただく本好きさんをご紹介いただき、リレー形式で本好きの輪を広げていきます!

Q1 自己紹介をお願いします

宮下あゆみこと言います。京都一乗寺にて Frau Pilz (フラウピルツ / ドイツ語でキノコ婦人)という名のドイツ菓子店を営んでいます。美味しいお菓子を食べたい→美味しいお菓子を作りたい→美味しいお菓子を食べてもらいたいというシンプルな歩みを進めた結果、今に至ります。ドイツ菓子、ドイツの合理性、きのこが好きです。

Q2 あなたにとって本とは何ですか?

自分が出会うはずがなかった世界につなげてくれる扉のようなもの。

Q3 あなたの好きな本を教えてください

『時間どろぼうと ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語 モモ』岩波書店(1976)著:ミヒヤエル・エンデ 訳:大島かおり
物事の本質を見抜く人に憧れます。モモは私の憧れの人です。人間味があり、暖かく、動じず、素直な心で物事を見られる、そんな彼女が友だちを大事に思い、行動するこの物語が大好きです。

Q4 記憶に残る読書体験、本にまつわるエピソードを教えてください

望月峯太郎著『バタシ金魚』(講談社1~6巻)です。中学校の頃初めて読んで、主人公の破天荒ぶりに衝撃を受けました。その破天荒ぶりが私の中ではNo1過ぎてずっと一番好きな漫画だったのですが、夫と出会った時に彼の一番好きな漫画も『バタシ金魚』でした。その後結婚して男の子が生まれたら主人公と同じ名前にしようと言っていたところ、男の子が生まれ、無事(?)主人公の名前に。願い通りかなり型破りな男子に育っていますが、破天荒な人って、漫画として読むのは楽しいけれど、自分が育てるのは大変なものなんだなあと骨身に沁みて実感する今日この頃です。主人公の名前は漫画にて確認してください。

Q5 Frau Pilz のオススメ商品を教えてください。

〈Stollen (シュトレン) *11~12月のみ販売 ¥2,850-(税別)〉

発酵バターたっぷりのイースト生地にラム酒漬けレーズンやナッツを混ぜ込んで焼き上げ、常温で保存しながら日々変化する味わいを楽しむお菓子、シュトレン。当店のシュトレンはパンというよりお菓子寄りで、しっとりほろっとした味わい、真ん中に挟み込んだマジパンが特徴です。クリスマスのちょっと贅沢なお菓子をぜひ味わってみてください。



Q6 あなたがもし京都でお土産や手土産を用意するならば何を用意しますか?

〈山田製油のビリッとくるぜごまらあ油〉ごまの香りとビリッとくる辛さは申し分なく、八角と山椒のパンチにやられます。瓶ではありますが小さくてすき間にちょっと入れられるコンパクトさもお土産に良い感じです。



Frau Pilz (フラウピルツ)

〒606-8167 京都市左京区一乗寺樋ノ町19-6 | 営業時間: 11:00~18:00

定休日: 日、月、火 (第3日曜日は営業) | 問合せ: <TEL> 075-712-7517 <MAIL> info@fraupilz.to

www.fraupilz.to @Frau_Pilz fraupilz